

浄土

七月号



法然上人鑽仰会

昭和十四年五月廿一日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別扱承認雜誌第三五二号)
昭和四十四年六月二十五日 印刷 昭和四十四年七月一日 発行

第三十一卷

第七号

百済観音 (国宝)

法隆寺蔵

ほほゑみてうつつごころにありたす

くだらばとけにしくものぞなき

会津八一

「百済観音をみて心慚しくなる理由のひとつは、近代に激しい内攻症を根絶してくれる点にある。私はそう思う。これを忘却の精神と呼んでもいい。(中略)もし此の世に大慈大悲というものがあるならば、それはすべての苦悩を、罪禍を、いかなる生そのものをさえ忘れさせてくれる力にちがいあるまいと思う。」

龜井勝一郎

不愉快なもの、いやなことを忘れたいと思うのは人間誰しも考えないものはいない。忘れようと努めれば努めるほど、よりはつきりと思いだす。忘れようと一時、誤魔化してみても、決して消えはしない。ところが、大きな力に包容されると、今までのことがすべて忘れてしまう。そういう人が身近かにあんがっているものでもある。それにしても、百済観音を「うつつごころ」といい、「忘却の精神」と呼ぶほどに、すべてを任せきれぬみほとけの姿がここにある。ぼろぼろとしたお顔には永遠の母親の面影が二重写しになっているのかも知れない。忘却の尊さは人に接して初めて判ることをも教えている。(石上真広)

—目次—

巻頭のことは 根 性……………(1)

随 想……………大野光一・宇高範江・服部光喜……………(2)

幸福を求める心……………奥野信太郎……………(4)

— . — . — . — . — . — . —

座談会 生活と信仰……………(8)

年々去来の花……………石上 善応……………(12)

ご法語をいただく……………(15)

世界を結ぶ生花……………佐藤 治子……………(16)

仏教人生訓 念死念仏の教え……………宝田 正道……………(20)

近世文名録 久松鑽瑞僧上……………高橋 良和……………(22)

浄土のこよみ……………大橋 俊雄……………(24)

一言法談 托 鉢……………渋谷 賢応……………(26)

書 評……………(32)

編 集 後 記……………(33)

— . — . — . — . — . — . —

日本浄土教語 門下の頭梁信空……………鈴木 成元……………(28)

たゞふかく本願を信じて念仏申さば、
一念須臾のあひだに、阿弥陀ほとけの
来迎にあづかるべき也。

法然上人御法語



根 性

日紡貝塚のバレー優勝以来「根性」ということがしきりにいわれるようになった。最近おこった、農大ワンドフォーゲル部の「しこき事件」もその極端なあらわれである。

一体「根性」とは何か。これが誤解されると「しこき」になるのである。わたしは根性とは仏教でいう「機根」の根と、「仏性」の性との二つから成り立つものだと考えたい。機根とはその人のもつありのままの能力であり、仏性とは人間がその本性として心の奥深くにもつ素質である。いいかえれば機根は顕在的な能力であり、仏性は潜在的な能力なのである。この二つのものが一つになって「根性」が出来あがるのである。ありのままの能力が本来あるべき力能によって支えられ、裏づけされた形なのである。

だから、この二つともに、元来は「自己」にかかわるものであり、みずからが発見し、みずからが養ってゆくべきものである。自分自身の内に求めるもので、他人にたよったり、他人の手で植えつけられるものではないはずである。それを棍棒で叩いたり、泥靴でけとばしたりするところに、現代人の人間疎外の狂暴な誤りがおこるのである。(信)

すくいい

大野 光 一

あまり健康でなかった私が、長年の仕事の無理がたたって、病院に駆けつけたときには、胃潰瘍と肺結核を併発して、どちらも手術をしなければならぬほどの重症となっていた。その上手術後の経過が思わしくなく、食事は流動物を少量摂るだけで、薬さえ受けつけない始末であった。しかも結核が悪化し、血痰は止めどなく出るようになっては、さすがに強情な私も死を観念しなければならなかった。だが凡夫の浅ましきとおうか実際に死と直面した時、私はただ生きたい、という無性な現世への愛着と死への恐怖感で一時もじっとしていられなかった。

このような時、突然郷里から、母の死が知らされた。私は、この日悲歎にくれて、夜半までまんじりともせず、人間の運命や過去の追憶に耽っていたが、その内ハッと胸を打つ

キルケニーの喧嘩猫

宇 高 範 江

(大正大学、国文学助手)

今年は冬が長くて心が重かった。それにもまして相変らずベトナムから伝えられてくる暗い争いのニュースは、一体どんな方向に進展していくのであろうか。愛し合うべき人間同志が争っていて、どうして国や人類の幸福が保たれよう。私如き者がいくら考えても手に負える問題ではないがと思いつつ、朝刊に目を通していろいろうちに、いつか雑誌で読んだ、B・ラッセルの面白い比喻を使った文が思い起こされてきた。

「もし手が指と争い、胃が肝臓と仲が悪ければ、人体は衰弱するばかりだ。人間社会でも各人が自分の体を気遣うように、他人の幸わせに心を向けたらよい。私達が食物を摂ると養分は体の末端まで行きわたる。しかし私達の口が体の他の部分の為に食物を摂取し、噛砕く労力を払ってくれることに、体の他の部

信じるということ

服 部 光 喜

(江東区青少年委員)

信仰という言葉で表わされる人間一生涯の心の持ち方、これは超人間的非科学的な神仏に縋るという態度、その様なことはくだらない事であるという風潮があるが、簡単にいい切って良いだろうか。これは一例であるが昨年のこと私の住む深川のある運送店の主人が真青な顔をして駆け込んできて、ここ数日家に幽霊が出るというのである。宿直の運転手が寝ていると部屋の障子がスッと開いたり変な音がするという。そんな馬鹿なことがあつてたまるかと、血気盛んな運転手達は二、三人ずつ泊るのであるが、夜半過ぎになると誰もがこの幽霊に脅され、声を出そうとしても声が出ず、起きあがろうとしても全身の力がぬけてしまうとのことであつた。そこで私はこの店主に店のあたりで何か祟(たた)になる様なことがあつたのではないかと尋ねた。考えるに

ものがあつた。それは母が生前口癖のように、私が死んだらお浄土へ参るのだといってゐたことであつた。私にはあれだけ信心の深かつた母は必ず自分の願ひ通りお浄土に往生したに違ひない、そしてこの時まで思ひもしなかつた浄土というものが私には実在するもののように思われた。

その日から、私は乏しい財布の底をはたいては仏書をひもといていった。当時私は絶対安静であつたが医師に隠れて読み漁つた。然し門外漢の私には經典は余りに難解で、一語を解くにも至難の業であつた。それでも、私には念仏以外に私の救われる道はないと信じ、一心に經典を読んでいった。

あれからすでに四年になる。現代医学に見放された重病人が格別の治療も受けず、どうか庭の草花の手入など出来るまでになつたことは、殆んど奇蹟に近い。

病氣は私一家を貧苦のどん底に叩き込んだが、然しこの悲しむべき病氣を縁として、私を仏法に近づけて頂いたことは、不幸中の幸であつた。

分は感謝しているだろうか。この種のさりげない他への思いやりが、人間社会の繁榮、混亂した現代社会の存続に不可欠な要素となるう。」といった内容であつた。平和を唱えてやまない人達は多いのに何故争ひは繰返されるのだろうか。

私は又どこかで戦争が始まつたと聞くと、キルケニーの喧嘩猫 (Milkeny Cats) という語句が連想される。アイルランドの伝説に出てくるその二匹の猫は、双方がしつぽだけになるまで冷酷に、とことんまで争ひを続けたという。だがもし双方がお互いに対して少しでも暖かい心遣ひ、親切な感情を持ち合わせていたならば、二匹とも幸わせに生き続けられたにちがいないのだ。何も国家間の戦争に限ったことではない。又争っている時ばかりでなく、毎日の生活の中に私もささやかな思いやりを忘れぬようにしようと改めて自分の心にいいきかせた。そして新しい核兵器さえ登場しかねないベトナムの戦いが、キルケニーの喧嘩猫に終らないことを願いつつ、新聞から離れて通勤の支度にかかつた。

昨年、の初め店の前で身元不明の老女がトラックに轢かれて死亡したが、何の供養もしなかつたというのである。昔から番町皿屋敷とか鍋島騒動とかいう亡霊の物語りは多く残されているが、実際にはないことと思つてゐた私も内心驚いた訳である。そこで早速組内の御住職に御足労いただき慰霊祭を修めた。数日後店主がやってきてその後はその様なことは起らず以前にも増して仕事の方も忙しくなつたとのことであつた。誠に奇怪なことであるがこの現代に實際あつたことなのである。このことを契機に私は信仰というこの心の持ち方有り方ということについての重大さを再認識したのであつた。しかし現在の生活機構からこの信じるということとは全く度外視されているといっても過言ではない。特に若い世代には前時代的なもの、取るに足りないものと考えられがちであるが、我々宗教人として誠に残念なことである。私も役職上青少年に接する機会に恵まれているのでその都度何らかの形で信じるということのありがたさを教えるのである。

幸福を求めめる心 (二)

奥野 信太郎

(慶応義塾大学教授)



ところが我々はどうも擬似幸福の追究ということを本当の幸福とすりかえて考えがちなものです。一日だって我々は擬似幸福を追究しないでは生きてはいられない。それにもかかわらずそれにばかりに気をとられていると、実は本当の幸福の追究ということをつい忘れてしまうということになってしまふ。昔お隣りの中国では大変この擬似幸福の追究ということとを軽蔑したものです。これは一つにあの国の社会構造が大変歪んでおりましたので、その社会構造の歪みからきた一つの考え方であると私は思います。例えば昔昔ずっと最果ての北の国の淋しい村に爺さんと息子が住んでいた。たった一頭の馬を飼っていて、野原に狩に出かけたり、或いはわずかばかりの畑を耕して住していた。ところがある朝その馬が逃げてしまった。親子の嘆きは一通りではなかった。ところが数日後、その馬が帰ってきている。しかも数頭の仲間を連れて

帰ってきた。さあ親子の喜びは大変だった。ところがその息子が今日はこの馬、明日はあの馬と取換えひっかえして野山に出かけておりましたところが、ある朝乗った馬が大変な荒馬でいきなりその息子を振り落した。その息子は落ちた途端足を折ってしまった。せっかくの喜びが今日の悲しみになったと大変に嘆き悲しみました。ところが丁度戦争が始まって若者という若者はみんな徴発されてしまったが、その息子だけは生れもつかぬ片端であるが故に戦争にかり出されることを免がれた。その時の戦争は非常に苛烈な戦争であって、出かけた人間の十人のうち八九人までがみな戦場の露と消えてしまったが、その男だけは不具者であるが故に、命を全うすることができたという。人生万事「塞翁が駒」禍福はあざなえる縄の如くという故事の話であります。

これなどは言換えますと、世の中の擬似幸福というものに

心を動かす人間は馬力であると同時に世の中の擬似不幸にやっぱり動揺する人間も馬鹿な話である。擬似幸福、擬似不幸という、そんなものに心を動かすのは馬鹿々々しい話だということをお教えしたものと私は思います。

それでは一体どういう生き方が本当に良い生き方であるか中国人はいうのか。だからそんなものに心を動かすのは馬鹿だ。それよりかどうせ浮世は狐と狸の化し合いだと。だからしてどっちが上手に化したかという、より良き騙し合いのできた人間の方が賢明な生き方であるという考え方を非常に持ってきております。これは小説ですが、八世紀頃「板橋記」という小説があります。「いたばしき」と書く地名です。丁度唐の都長安から約四十軒離れたところに板橋という小さな村がある。その村に三娘子サンリョウワシという中年の女が小さな旅籠屋を営んでおりました。ところが都の長安でこの三娘子サンリョウワシの評判が非常に高い、あの女は非常に親切な女である。というのは中国では驢馬ロウバというものが旅行者にはなくてはならないものなのです。丁度その村は都の長安から四十軒、それは約一日行程です。朝長安を出発して日がとっぷり暮れる頃板橋に到着する。とすると驢馬はちょいちょい足などを怪我したりする。その時三娘子サンリョウワシという旅籠屋の女将さんは、それはお困りでしようというんで市価の三分の一、四分の一という値段で

驢馬を分けてくれる。その評判が非常に高かったのです。ある時趙季和チョウキワクワという旅商人が長安を出発しまして板橋に差掛かった時に日がとっぷりと暮れて、どうしても宿に泊らなければならぬ。ところが生憎その宿が満員なのである。が、一っだけ壁除の奥の寝台が空いていた。一番悪い場所でしたがそこへ泊めてもらうことになった。さて旅の疲れで全部の旅人は寝てしまったが、趙季和だけ何んだかその晩は寝つかれない。そこは一番奥の壁際である。壁といっても板壁であるから板の隙間から明りが洩れ、隣りの主人の三娘子サンリョウワシの寝室が見える。寝れないままに、はてどうしているのだろうと、そっと覗くと三娘子がやおら寝台から起き上って、棚から箱を取り、蓋を取って中から木彫の人形を出した。百姓のような形をしている。続いて木彫の牛を出した。そして小さな鋤鉞のようなものを出して、その箱を棚にあげてしまい、その人形を並べました。やがてコップに水を汲んできまして、何か呪文のようなことを唱えて、そのコップの水を吹きかけますと、その人形が手をあげてのびをした。その木彫の牛が首を動かした。これはおもしろいと、何が始まるか見ていまして、やがてその小さな百姓が牛のうしろにその小さな鋤を付けて丁度一畝敷位の土間を耕やし出した。すっかり耕やし終ってしまうと三娘子が小さな袋を出した。その袋には種

が入っているらしい。すると小人のような人形が種を蒔いて歩いている。種をすっかり蒔いてしまうと、芽が出た。芽が出たと思うとすっとのびた。のびたと思ったら花が咲いた。花が咲いたと思ったら実が成った。ふとそれを見ると蕎麦の実なのです。そしてその蕎麦の実をすっかりとりまして、やがて臼をだし蕎麦粉を作りだした。三娘子がお盆を持ってきて、できたそば粉をどんどんそれにあげ、やがてうず高くなる。すっかりできたようだ。すると三娘子は又コップに水をもってきて呪文と共に水を吹きかけると今まで動いていた小さな人形の百性も、もとの堅い人形になってしまった。そして箱の中に収めて棚に上げた。これは夢のようなことだと、又何をするのだとのぞいてみると、そのでき上った蕎麦粉で蕎麦の焼餅を作った。中国では「餅」という字を書きますと全て穀物の粉を油でこねて、それを鉄板で焼いたものを「へい」という。日本でいうパイなどを「へい」ということができる。つまりその三娘子がそばパイを作りあげた。そしてそばパイができあがりますと、さてあくる朝になりました。寝台をすっかり片付け、テーブルが運ばれました。七・八人の宿った客人達が食卓についている。そこで三娘子が出したのがあのそばパイです。これから何んだか変なことがはじまるような気がしたので趙季和は物陰に隠れて様子を窺っていま

すと、何も知らない旅人達はそのそばパイを一つずつ取って、それを口の中に入れ、二口三口、もぐもぐやった途端にみんなのけぞりかえってひっくりかえった。その途端彼らは驢馬になってしまった。その有様を見てニタリと気味の悪い笑をもらしたのが三娘子です。客人変ずるところの驢馬を追いたてて、うしろへうしろへ連れて行く。そしてうしろに柵があり、その中に数頭の驢馬が入っており、更に七、八頭の驢馬を入れた。その有様を逐次見ていた趙季和は寸前のところで驢馬になるところを助ったのです。さてそれから一カ月後またも偶然のことから趙季和はその板橋に泊らねばならなくなりました。日がとっぷり暮れてしまいました。よし今度はどうしてやるかと三娘子の所を訪ねる前に自分は他の店からそばパイを一つ買いました。それを懐中に入れて三娘子の所へ行った。その晩は相客が一人もなく、宿ったのは趙季和ただ一人でした。さてその晩宿って様子を見ていますと、この前と同じことをやっている。自分一人でも驢馬にする気かと思った。さてあくる朝、一人であったが食卓を出してくれた。持ち出したのがタペ作ったと思われるそばパイです。今茶を持ってきましたからと三娘子がさがった隙に自分が持ってきた安全なそばパイをそこに置き、向うのそばパイを懐中に入れた。何も知らない三娘子がそこへやってくる。趙季和は

自分が今置いたばかりの安全なそばパイを食べた。時に私もそばパイを持ってきているので食べ比べてはみませんかといつて、悪い呪いのかかったそばパイを三娘子に渡した。三娘子は自分の作った呪いのそばパイとは知らないで、それを割って口の中に入れた途端ひっくりかえってメイメイ鳴き出して驢馬になってしまった。そこで趙季和は三娘子変ずるところの驢馬に乗って出かけたのである。ところがその驢馬は仲々丈夫で、絶対つまづかないし、すりむきもしなかった。乗るも乗ったり四年間その驢馬で商売をしたのです。丁度山西省の函谷関にさしかかった時、道端で「趙季和さん、趙季和さん」と呼ぶ声がし、見るとそこに一人の白い着物を着た老人が坐っている。「もう三娘子も充分それで罰をくらったと思うから、この辺で一つ許してやっては」といった。考えて見ると、四年の間実に忠実に尽してくれたので、堪忍してやることにした。するとその老人は立ち上ると、その驢馬の口を持つて引き裂いた。するとその中からもとの姿をしたままの三娘子が飛び出してお辞儀をしながらどこかへ行ってしまった。

このお伽話みたいな話は結局は狐と狸の化し合いだからどっちが上手に化したか、より良く化した方が賢明な生き方であるという一つの人生観を示している。私は先に申しましたように擬似幸福を極端に軽蔑して、どっちが狐と狸の化し合

いで勝利を得るのかというような考え方はむしろ不健全な考え方であると思います。やっぱり我々は生きていくかぎり、擬似幸福を追究しなければならぬ、けれどもその裏付けに本当の幸福を忘れてはならない。つまり擬似幸福の追究を意義あらしめるために、本当の幸福の追究ということを裏打ちする必要がある。これによって初めて擬似幸福の追究ということが意義を生じてくると考えます。

さてそれでは本当の幸福とは何か。本当の幸福の追究ということとはなほだ簡単であるように書いて大変むづかしいことだと思えます。我々は生きていくかぎり、ほっぽいておいても肉体的にも精神的にも成長していきます。その場合、より人間的に成長したいと請い願ひ、それをはっきりと自分で自覚することができたならばその人は幸福に向つて前進しつつあるものと考えてよいと思う。自分を振り返って見た時、確かにある時よりは人間的に判断力も知性も感情の生活も全てはつきりと成長したと自覚することができたならば、その人は本当に幸福への追究を怠らなかつたとみてよいと思う。この様にいうことは簡単であるが、それを実行に移すことは大変難しいと思う。しかし人間一人々々がその生活・境遇・環境等それぞれ異なつたなかに、いかに応じて行つたらよいか、各個人の人間の成長の中に刻み込んでいけば自ずと打開への道が開けると思ひます。

座談会 (一)

生活と信仰

ものに即して当然信仰がなければならぬし、生きていくかぎりには信仰というものが必要であると思います。

宝田 先のチエホフの例を裏がえせば佐藤先生がいわれました『生きる』ということだと思います。『生きる』ということは『生かされている』ということを我々が解釈するか否かによって信仰といえると思います。

佐藤 そうですね。信仰というのは『生かされている』ということ、いかなる宗教に於てもそうだと思います。

宝田 我々はいつも死という領域に侵されている。目には見えないが死というもののいつかはぶつかなければならない。それが日常生活では忘れがちになっている。いつ死に遭遇しても自分がここまで生きてきたという有難さを感じる。そういうところに信仰の支えというものが生じてくる。

佐藤 その通りですが、そのことが現代人にとってどの程度捉えられているかということなんです……

安居 佐藤先生や宝田先生はその様な素養をもって判断されていますが、一般の人々は明

司会 生活と信仰ということについて皆様の御意見を伺いたいと思います。信仰がどのような形で生活の中に受取られているか、或いは生きているか、生かされているか、その場合どの様にして捉えられているか、又生きているか、丁度お盆となりますのでこのことなども含めてお話しいただきたいと思います。

信仰の基本



宝田 生活と信仰

氏 といってもいろいろな角度があると思いますが、一例として、チエ



佐藤 信仰がどう

氏 いうことかということですが、一言でいうならば『生きる』ということその

日食べるために生活しているのです。『生きる』ということに対する宗教教育の不徹底さがあると感じますが、この様な反論もあると思うし、若い世代にはそれなりの反論があると思います……

宗教と生活の結びつき

北沢 私達の世代としては、先の雨乞いに行



くだけでも或氏は雨が降るかも知れないというところ位だと思います。というのは人

間がこの様な不安な状態に生きているから宗教はかならずあると思いますが、それが若い人の表面に出てこないだけだと思います。これは私自身のことなのですが、幼い頃はお坊さんに来てもらって拝んでもらったりする仏教の行事が家の中で行なわれていましたので自分が何宗であるということが分っていましたが結婚後は、主人の父の死などがあったにもかかわらず、何も知らないということとは、かつての子供の頃の様に仏教というものが生活の中に深く入っていないからでしょうね。

宝田 それは仏教が入っていないのではなく誤解されているということだと思います。仏教は葬式や法事などの行事を行うことである。極端に言えば僧侶がやるものであるという考え方が一般にあるためだと思います。従っ

出席者

宝田 正道

(中央公論宣伝企画部長)

佐藤 良智

(大正大学教授・文庫)

北沢 杏子

(シナリオライター)

安居 香山

(大正大学助教授)

司会 宮林 昭彦

て本当の仏教がなくなったのではなく仏教の布教の仕方が悪いということによって逆に惑わされていることだと思います。信仰は個人のもですが、家族主義の一つの弊害として昔から伝来してきた菩提寺の宗教をその

まま家族ぐるみその宗教と決めてしまったことに問題があると思います。

北沢 そういう意味ではPRが足りないといえますか、私共には何宗がどういうものであるか分らないということはそういうPRが足りないと思いますが……

安居 それと一つには、戦前は封建社会という中である程度宗教選択が拘束されていたのであって、戦後その様なものが出てきた時にはむしろ信仰などよりも若い人には社会的に他のものがいくらでもあるので、それに流れていくということだと思います。

佐藤 戦前はその様な拘束の中にもPRの様なものがあつた様に思われますが……

安居 例えば法事があると一家あげて行くことが義務化されていたから、知らず知らずPRを受けていたのです。今は老人だけが行き若い人の行くことが失なわれたのです。

北沢 その様なものを探す目はあると思いますが、PR不足ではほとんど私達の生活の中にはありませんね。先日京都に取材した際仁和寺で某親王の年忌を行っていました、やはり有難いと感じているのは老人だけで、生活

の中に宗教があるのは彼らの世代で終りではないかと大変さびしく思いました。

司会 それは日本に仏教が受入れられた折一つの文化とか思想とかという形で受容されたと思いますが、それを国家として制度化し育てていく。ですから当然慣習とか行事として残っているが純粋な信仰という形で生活の中に融け込んでいない。こういうところが災いしていると思いますが。それにもう一つは空気が、空気に仏教という言葉が自覚すると否とにかかわらず非常に不用意に使っていると思います……

宝田 そういう意味で私は今使われている仏教を第二仏教といたいたいです。第一としての本当の仏教は目には見えないし、形も分らないがあることはあるのです。例えば茶を出された場合初対面の人に出された茶にもかかわらず飲んでしまいますが、これは全てを信じているからこそ飲めるので、この様な芽は誰にもあると思います。これを信仰の方へ発展させるか否かは個人の勉強次第だと思います。又信仰というときと寺とか僧侶に結びつけ、それが古い世代で終ってしまったという

ことですが、これは終ってしまったのではなく、若い人にはありませんが、年老いてある程度の年齢に達すると死の領域に近づいてくると感じ何か超人間的なものに縋りたいという気持ちが強くなってくるのだと思います

信仰と文学

佐藤 話しは違いますが、北沢さんがシナリオを書く場合、人生問題等の折宗教というものをまともに取りらないでさけて通る様なことはありませんか。

北沢 文学を少しかじりますと必ずつき当るのが宗教の問題です。映画等を見ても例えばスウェーデンの様に社会福祉の進んだ国でも最後につき当るのは神ということ。従って文学のある壁をつき破りたいと思う時は宗教ということを知明していかなければならぬのです。

宝田 外国映画を見ましてもキリスト教の家庭の人々の場面では十字を切ったり、その様な所が素直に出てきますが、日本の場合はそれがどうもありませんね。

佐藤 それを無視するのがインテリの特色と

いうところですか……
安居 そういうものを書くとき売れないという

ことですね。



氏 北沢 恋愛等を除
居 けば全て生とか死
安 とかいうことにな
ってしまいます

ね。

宝田 それは先にいった様に仏教を誤解して寺や僧侶との関係のみ仏教であると考えられているということなんです。

安居 そういう意味で最近文学作品で宗教に救いを求めてきたものはありませんか。

宝田 そうですね。仏教出身の作家が宗教との対決ということよりか自分のもっている宗教的知識を裏面の方から捉えて世間にぶちまけているという作品があるだけです。

北沢 仏教が彼らの武器とっては語弊がありますが、人々の知らない世界だとして大分悪く作っている方が多いですね。

宝田 つまり仏教が新しい題材として捉えられ、それを武器として売りつけるから人々は大変珍しいことがあったとして増々仏教とは

この様なものであったかと思う様になつてくるのです。これは宗門の責任にもなると思いますが。又次にくるものは科学的書物だと思ひますが、今は宗教を売り物にその裏側を突く作品が流行しているのです。

佐藤 その次に科学を通して本当の宗教が出てこなければならぬですね。

宝田 そこまで宗教を勉強することは非常にむずかしいことですね。經典がむずかしかったり、死と対決するという修養がむずかしかったり……本當の文学は死と対決したところに出てくると思ひます。

信仰と布教

佐藤 安居先生の御専門なんですが、創価学会などの若い人の考え方はどうですか。

安居 よく分らないのですが、ただ彼らには一つの危機意識というか、末法意識ではない危機意識というものがまずアピールする様に教えこまれているということだと思ひます。

それは日蓮があつた当時叫んだ危機である末法的仏滅危機、戦乱が続いた人間的危機、その様なものが強調された日蓮教が現代的にいえば政治の頽廢という政治的危機、貧困という

経済的危機、原爆というような様な人間的危機という様な種々な危機意識が若い人に植えつけられてその中からある一つの純粹な信仰というものがある意味で植えつけたと思ひます。

佐藤 浄土宗が出現した時もそうなのですが新宗教が出てくる時はかならずこれを利用するといふか、その点なんですね。

安居 だからその危機意識にかられやすい人が入っていく。所謂中産階級の人々なのです。ですから家庭不安とか病氣とかいふものが一つのひっかかりやすいチャンスとなつて、それを組織とかムードとかによつて更に政治的なものを加えたところが若手を引き入れたことにつながると思ふが、それを一概にファシズムといふことはできないと思ふが宗教宣伝の本質を突いていると思ひます。

宝田 それに拍車をかけているものに既成教団の頽廢が上げられますね。



司会 それと共に

氏 インテリのトレードマークといふのが無宗教で、信仰のないといふこと

がインテリであるといふ考え方が日本人の中にあるのではないでしようか。

宝田 それは仏教の教え方が説教という高いところからなすことに中心があつたために反撥を感じたりする訳だと思ひます。宗教とは若い人とか不具者とか乏しい人など精神的に弱い人々の味方であるといふ意識が非常になつたと思ひます。例えば鎌倉時代には貴賤男女を問わず特に下の人々に向つて教化されたが、今はインテリに向つて活字とか説教等の種々な形で行なうところにアピールする力を失つてきたためと思ひます。

佐藤 そのことは日本ばかりではありません。昨年ヨーロッパに行った時つとめて教会へ行つたのですが、そこでもやはりその通りですね。少し位行つたきりでは、はっきりとしたことは分りませんがやはりその点があると思ひます。それではキリスト教の信仰がなにかといふと、恐らく生活の中に入つてあると思ひますが、その様な形ではヨーロッパでも衰えるところにきているのですね……

安居 日曜日にはミサに行くのでしう。

佐藤 日曜日でもその様でした。(つゞく)

年々去来の花

—うら盆会におもう—

石 上 善 応

(大正大学助教授)

四季をあやなす色彩りは、ひとのもつ情緒や哀感をひとしおこまやかにしてくれる。とくに日本人の感性は感傷的なほどに、ものごとを季節の移り変わりに託することが多い。能の大成者、世阿弥の「風姿花伝」の書は、題名の記す通りに、花に芸を託しながら、世阿弥自身の苦悩を語っている。わけでも「年々去来の花を忘るべからず」の一句は、その最たるものであろう。年令に応じて、過去に身につけた花と、将来身にそなわらなければならぬ花の意味で世阿弥は用いている。いま、この書を離れて、考えてみると、「年々去来の花」は日本人の心性と切り離すことのできないことを教えてくれる。

花々は季節に応じて咲くから美しい。たとえ小さな野

に咲く草花であっても、その所、その時をえて、自然のなかに調和してこそ、花の持ち味が生きている。これ見よがしに咲かなくとも、花はやはり花の美しさを身につけている。むしろ、そのような花を忘れないようにすることが、大切な思いやりというものでもある。しかも、季節がめぐってくると咲き、やがて散って行く。ひとに惜しまれてはまた来る年に憧れを抱かせる、そこに花の味がある。蕾がふくらみ、満開となり、花びらが一ひら落ちて行く、その風情も美しい。年々去来するからこそ、花は美しい。年中咲いたままで散り行くことを忘れた花は、人間の心に残ることはない。それは造花に等しいといえるだろう。いうならば、人間は未完成の美し

さを知り、やがて完成するであろう可能性への美しさを秘めているところに大きな魅力を感じていた。それをハ仏性Vと呼んでもよい。

敬愛する母親を亡くした悲しみ、いとし子に先立たれた淋しさというものは、ある意味で月日がそれを忘れさせてくれる。年中、親しい人の死が脳裏を去らずに、悲しみ淋しい思いに浸っていたならば、その人は異常な神経の持ち主であるに違いない。忘れさせてくれる時間というものは人間にとって不可欠なものである。と同時に、亡くなった人は欠点もあつたはずであるのに、良い面が浮き彫りされ、欠点が薄れて行くのも月日の作用によるのであろうか。良い面が鮮かに脳裏に刻みこまれると、なつかしい感じがそれとともに離れなくなってくる。季節の訪れとともに亡き人を思い起こし、ありし日の思いを出を語り合うのは、まさに年々去来の花にほかならない。しかし、本来の年々去来の花では決してない。世阿弥は「幼少の時よりも老後までの芸を一度に持つ理なり。さるほどに年々去り来る花とは云えり」と述べているからである。いつでもどこでも、時に応じ分に

即した芸が大切であると力説している。このことを思い合わせるならば、月日が忘れさせてくれるように見える悲しさ、淋しさが表面的なものにすぎなくなってしまう。それは単なる感傷にすぎなかったといえよう。

死という厳肅な事実にはわたくしに何を教えてくれたのか。ハいのちVとはどんなものか、どんなに大切なものかと教えてくれていたはずである。そう気づいた、いや気づかせてもらったわたくしは、以前のわたくしではない。わたくしと亡き人はハいのちVの連がりを感じ得ているからである。大いなるいのちとは人と人とのふれあい、いのちといのちの感得から生ずる。むしろ、大きないのちに支えられている自分を見出したときに、その人の瞳は深く、澄み切ってくる。歎きや悲しみはすでに消え去っているばかりでなく、その瞳には、いつでも亡き人のいのちと自己のいのちが二重うつしになった心境をくみとることができるようになる。これこそ、年々去来の花という心境に等しい。

花はハ仏性Vというよりも、ハいのちVの表現である。その花をなつかしみ、忘れることのないようにすることは、仏者の勤めである。わたくしを中傷したり、嘲

笑したり、お世辞をいったりする人とも、やはり、ひとつのいのちのふれあいがある。そのふれあいを通して、わたくしが大きくもなり、小さくもなる。ともすれば、多忙な日常にかこつけて、自己を失ないがちなわたくしに、またもや、思いを新たにさせてくれる日が近づいてきた。

お盆は親しい人々への供養のためばかりではない。供養を通して、いのちのふれあいを感得する反省の日でもある。生前を思い出しながら好物を作り、花を供え、手を合わせつつ語り合うとき今は亡き人のいのちが、わたくしの中に、いきいきと生き続けている。そのいのちのふれあいにわたくしは合掌していたのである。

無縁な人が存在するはずはない。どんな人でも、やはりわたくしと密接に関係しあって生き続けている。有縁であるならば、親しい肉親にのみ手を合わせることが愚かな行為であろう。親しき人を通して、その背後にある大いなるいのちに手を合わせるとき、実はわたくしが大いなるいのちに見守られていることを知るときでもある。

お盆の手引

お盆は正式には盂蘭盆というが、それは目蓮尊者が餓鬼道に堕ち、苦しみにあえぐ母を救うため、その苦しみを除こうとしたことによると盂蘭盆経に説いている。従って倒さに吊されるような非常な苦しみを受ける死者を救うために、祭儀を設けて三宝に供養することである。もとは安居の終えた日に衆僧に飲食を供することを指した。後にこれが転じて祖先の霊を供養して餓鬼に施すという行法をいうようになり、日本では斉明天皇三年（六六三）以来行われている古い行事で、民間信仰の最も身近なものとなった。奈良・平安時代には毎年七月十五日に公事として営まれ、諸寺院に於ては盂蘭盆講を行なつて、いろいろな論議がかかわされた。鎌倉時代になると、清浄な地や水に食物を投げて、悪道におちて飢餓に苦しむ衆生や餓鬼に施す法会である施餓鬼会をあわせて行なうようになった。室町時代には燈籠や大文字などの送り火の行事が起り、民間の間では精霊祭が行なわれるようになった。更に江戸時代になると、十三日から十五日までを盂蘭盆として、飾物などの売市や盆市が町角をにぎやかすようになり、家々には精霊棚が設けられ、祖先の霊を祭り、切干燈籠を飾り、僧侶を請じて棚経を行なうようになった。この頃から闇魔詣や盆踊などが盛んになった。農閑期等の都合から、旧暦によるところや八月の十三日から十五日まで行なう関西など、地方色豊かな行事である。

「法語をいただく」

このゆへに阿弥陀ほとけ、五劫に思惟してたて給ひし、深重の本願と申すは、善惡をへだてず、持戒破戒をきらはず、在家出家をもえらばず、有智無智をも論ぜず、平等の大悲をおこしてほとけになり給ひたれば、ただふかく本願を信じて念仏申さば、一念須臾のあひだに、阿弥陀ほとけの來迎にあづかるべき也。(念仏往生要義問答)

高僧たちの申す念仏とわれわれ普通人の申す念仏とは、勝劣の違いがあるでしょうかと、ある人が法然上人にお質ねしたところ、上人は「功德ひとしくして勝劣あるべからず」と答えられ、次のように説明されました。

口先だけでは経文を誦し、身体だけは仏さまを礼拝しているのだが、心の中では思いたくもない煩惱が次から次に襲ってきて、一つところに心がまとまってくれないものであります。何か善いことをしようと思っても仲々できないのに、名誉や欲望にかられたことに

なると止めようとしても止まらない位に専心努力してしまいます。これが凡人の姿であり、すべての人の実態であります。

人間とはこのようなものであるならば、ほんとに人間を苦から救い、極楽に往生させるにはどうしたらよいのでしょうか。阿弥陀さまは非常に長い間にわたって考えられ努力されて、遂に念仏を申す者は必ず救うとかく誓って下さいました。

従って阿弥陀さまのお誓いは相手がどのような人間であって、その性質や能力や行為によつて区別されるものではありません。例えば法理にかなった善行を行う人と、そうでない人とで区別しません。戒律を守る聖者であっても、また戒律を守り得ない人であっても選りこのみはしません。普通の生活を営んでいる者も、家庭をすてて修行する者もわけへだてはしません。仏法を深く学んだ学者であろうが、何も學問をしない者であろうが、それは問題になりません。要するに平等の大悲を起して、万民を救うとお誓いなされたのであります。

このような阿弥陀さまを信仰し、お念仏を

申すならば、一瞬にして仏さまはお迎えに來られます。

そして更にこう申されました。

「むまれてよりこのかた女人を目にみず。酒肉五辛ながく断じて、五戒十戒等かたくもちて、やむ事なき悪人も、念仏に不足のおもひをなして、余行をまじえ申さんにきては、仏の來迎にあづからん事、千人が中に一人、万人が中に五三人などや候はんずらん」

こうしたことは凡人の論議によつて決して判るものでありません。ただ信仰するだけであります。お念仏の力と申しても、これを深く信仰しない人にとっては、何んの役にも立たぬものであります。

ここに深く信仰しない人と申したのは、たとえ阿弥陀さまを信仰したにしても、自分が凡夫である事を深く反省しない人のことです。學問を積み善行にはげんだ人が自分のお念仏は他より尊いのだと思ったり、また一人離れて清い生活を送っている人が、俗世間の人のお念仏とは違うお念仏を申していると思ったりするとすれば、それは本願を深く信仰しているとは申せません。(村瀬秀雄)

花 生 ぶ 結 ぶ 世 界

——国際イケバナ会議に出席して——



子 治 藤 佐

(鎌倉大仏殿内室)

五月二十二日の朝刊の「ときの人」の一こまに「人が違う国が違う習慣が違う国際関係が違う……の違いくめの中で最も大切なことはお客様を暖かくもてなし、日本に来てよかったという印象を与えて帰えすことでした」と、今度国連次席大使になられた方の言葉が載っていた。

一昨年カリフォルニアのサクラメントで、又昨年ニューヨークでイケバナインターナショナルという国際会議に出席した私は今年は五月九日から十二日まで東京のホテルオークラにて開催された初の世界大会に鎌倉支部の代表の一員として出席することになった。

イケバナの本場の日本へ世界中にある八十以上の支部から代表が集まること故、本部の会長（日本婦人）と幹事、そしてイケバナ各流派の先生方の努力と力の入れ方は大変なものであった。プログラムとか会議運営とか接待とかいう各部が作られ、会員もその下で働くことになり、私は接待係のコーチエアマン（副長）に推された。「日本に来てよかった」という良い印象をもって帰ってほしいと、そして次席大使のいわれる通り各国の人達に違、いというものがあらゆる面に表われて来ること故、外交官はもとより外人と接する「一人々々が考えなくてはならない」とこの一文は私の心をひいたのである。

イケバナインターナショナルとは十年前にアレンという陸軍大将の夫人が創立した会で本部は東京に置き、アメリカに八十そしてヨーロッパにも支部があり、急速度に発展した会である。鎌倉には五年前に支部が作られ私は二年前より支部長になって、この六月に任期満了で辞した。

この会の目的はイケバナを習い、或いはそれを通して日本の文化の研究を行なうという

ことなので、イケバナの先生はもとより、何か勉強して行きたいという人々が入れるわけである。

イケバナは仏教的な芸術でもあること故、

一昨年サクラメントの年次大会の晩餐会には、花山信勝先生のお祈りから始められた。

これは外国人の会には国旗掲揚があり、宣誓の言葉をのべ、お祈りをするのは当たり前なことであるけれども、特にこの会が真宗の花山先生を迎え、先生のお祈りをもって華やかな晩餐会を始めたことは、一仏教徒として感激したことであつた。そしてサクラメントで或いはニューヨークで学んだ接待の仕方、人と人のつながりに私のみならず、日本的に、日本人らしさをこの時こそ示さなくてはと張り切ったわけである。婦人の会として三百余名も東京で集まる国際会議はこれが初めてではなからうか。

先ず会の運営・議事の取り上げ方も私達日本人の会のものと違う点がある。支部を例にとって考えてみると、役員即ち支部長・副支部長・会計・書記は選考委員によって選出され、月の例会に発表して会員に異議の有無を

聞く。異議がないと次には会長が各部に分れている係長を推薦する。例えばプログラム・受付・特別番組・接待係等で、これらの各部長の下に二、三名ずつ委員がいて相談会には一堂に集まり、議長は支部長がつとめる。

「これから会を始めますという言葉も規定の言葉がある。会計報告・記録報告も一々支部長の要請により報告され、そして議題に入る。一つの議題をもち出すと、誰かが「アイセカンドイット」と声をかけないと討議に入れない。支部の会合の時は手をあげ、議長に発言の許可を求め提案をするけれども、総会の時は、例えば「佐藤治子、カマクラ支部、支部長」と名乗りをあげねばならない。日本語ならば頭も使われないけれど、英語で話さなければならぬ。私は少なくとも日本にある支部ということをして、日本語と英語で話すことにした。でないと日本人会員には何が「セカンド」か、何が「ザモーション」か、何からである。この度の大会は日本で開催されたにもかかわらず会議は英語で進められた。一支部の相談会にも、たまに一人が何か

提議するとそれに対し色々な意見が出る。うっかり「セカンド」という言葉なしに討議に入ってしまうと、あわてて机をトントンと叩き、「誰かセカンドする人はありませんか」と初めへもどしてやり直さねばならない。これに慣れるまで数ヶ月を要した。セカンドとは提案に対し同意するという意味である。採決を取る時には「アイ」(諾)「ネイ」(反対)という言葉が使われる。この一つの提議に対しても各国人の集まりだと考え方の違いが出て来て、外人側で軽く考えることが我々には「トンデモナイ」というし、我々に納得できることが外人には分ってもらえないこともある。友人として付き合う外人は実に暖かい。けれど一たびビジネスとなると、「まあまあ」とか、だまっていたりはできない。謙遜したり損になることも不徳の至りなどと考え易い東洋人的な考え方や態度を解ってくれる外国人は少ない。

さて五月に入ると続々と各国からの代表が到着した。ホテルオークラのロビーは空港の様なにぎわいで、抱き合ったり、キッスしたり、御辞儀をしたり国際色豊かに婦人ばかり

なので華やかである。ワシントンやニューヨークからは多数がどっと着いた。ロンドン・ドイツからは一人ずつ、ホンコン・フィリッピン・オーストリアそして遙か遠い南アフリカよりも代表或いは支部会員が参会した。イケバナを通しての友好は深められる。けれども朝から夜まで四日間も外人の多い中で過し働らいているとやはりそれぞれのお国柄がでてくる感じが感ぜられる。ケルンから来られたデッブリと太った婦人はドイツ人の優秀さを誇るかの様な態度である。そして日本人には親しみを感じるのか話したたら仲々はなさない。貴族的な感じのヨーロッパの人達は氣さくで御世辞をすぐいうアメリカの人達とはなじめない様である。

この大会中三日間池ノ坊・小原・勅使河原三流家元のデモンストレーションが催された。なお特別に東京都ヘイケバナインターナショナル創立者アレン夫人の発意で全米支部の寄附金によりドックウッド（花ミズキと日本では呼ぶ）の贈呈式が行なわれた。そして名誉総裁の高松宮妃殿下を頂き華ばなしく歓迎昼食会を催した。二日目には東宮妃美智子

殿下、常陸宮妃、秩父宮妃、高松宮妃、三笠宮妃殿下と姫宮と、各妃殿下方が美しい日本の着物を召され三時間近く正面の貴賓席に御腰かけになられている御様子は実に圧感であった。外人達も御美しい妃殿下の御成りに興奮し、感激は一入であった。私達も「日本ならでは」の誇りを深めたのである。

最後のサヨナラ晩餐会には高島屋の好意によるファッションショウが催された。平安朝時代より現代に至るまでの衣装でよりぬきのモデル達が次々と現われる。最後に二人の外人が振袖を着て静々と出て来た時、一同大喝采で迎えたのであった。いつまでもこのすばらしいショウと演出は外人のみならず私達日本人にも楽しい思い出を残してくれたのである。その後日物語りをしている外人達の話を聞いて私はここにも又日本人と外人の態度というか、習慣というかその違いに氣附かされたのであった。それは最後に着物を着て静々と現われた二人が観衆の中を縫って歩く時、にこやかな顔でしなやかな日本着物にふさわしく腰をかがめ御辞儀をして愛敬を振りまいていたことである。それに引き換え日本

人のモデル達は美しい顔にはほえみがなかったというのである。そういえばなるほど人形の様な感じであり、一方外人達は日本着物をこなし、臨機応変な御辞儀をし、しなを作つて去つて行つたのである。「日本人は氣が付かず」というのもそういう能面的な表情に慣れているせいであろうか。もって生れた習性の差であろうか。これは日本のモデルになる人達に聞かせて上げたい批評であつた。

各国の婦人達の衣装で美しいと定評のあるのはインドのサリーであつた。けれど三日目の会議中、議長が会議を一時中止して、「ビザが取れなかった為、折角初めから出席できなかったはずの朝鮮の代表が遅れて到着され、今会場に入られました。皆さん拍手して迎えて下さい」とアナウンスされた。一斉に後を振りかえると七人の代表が朝鮮服で入つて来られた時の華やかさ。これは実に驚きであつた。というのは色とりどりでスカートも裾までの長さの衣装で、朝鮮の礼装の美しく派手なことに皆目を見張つたのである。しかも七人揃つて入つて来られたその美しさは、サリーと又異なる美しさをもつて私達を驚かされたの

である。その夜の晩餐会に接待役の主任補佐である私はこの気の毒な方達をメインテーブル近くの良い席へ陣取らせて上げたいと申し出たところ、全員揃って賛成してくれたのである。イヴニングの華やかな外人達、訪問着姿の日本人達の中で七人も揃って赤・グリーン・ブルーの鮮

やかな色が白の上着によく似合う朝鮮服を着た代表達は実に立派で中央のテーブルに明るい色彩をそして明るい雰囲気をかもし出したのである。婦人の国際

会議はこうして華やかな中に幕を閉じたのである。

最初に引用した一文章の様にこのビザの問題も「国際関係が違ふ」という場面にあった訳である。どんなにいらだっていたことであろう。その心も表面に出さず、静かに入場し



鎌倉への一日旅行。高德院庭園にて昼食をとる大会参加者。約140名来る。

静かに真中のテーブルについて七人の朝鮮の代表団の態度に敬意を表さずには居れなかった。会の間日本人だけならすぐ分ってもらえるのと思った時も無いではなかった。けれどもこうして各国の人達三百人の中へ入って会議に加わり、行動を共にした四日間、インタ

ーナショナルの言葉の持つ重要性を泌々味い勉強になったのである。一つ問題がこじれると、そのためにその国が控えていて、体面を考えずにはいられぬ事にもなるのである。単に旅行して来るのとは違う責任を感じずには居られないのである。

大巴賢充著

はなし 阿弥陀経

―常夏の国ハワイで読んで―

B 6 判・二七五頁

価七〇〇円 一〇〇円

西本願寺派布教師としてハワイ
布教に献身された著者の、なが
い年月をかけて解釈を施したは
なしことばによる阿弥陀経

東京都千代田区飯田町一ノ二十一

大 道 社

振替 東京 八二四七番

念死念仏の教え

宝田正道

(中央公論編集宣伝技術部長)

虚空にあるも

海にあるも

はた、山間の窟にあるも

およその世に

死の力の及び得ぬところはあらず

(法句經第二二八)

「第二の性」で有名なボーヴォワールの著書に『人はすべて死す』という一巻がある。題名の通り、ズバリ人はすべていつかは死んでゆかねばならない真理を説いたものである。いや、生きとし生けるものは、何でもみんないやおうなく死を迎える運命をもって生れて来たのである。だから、その書にも「人間は生れた時から死にはじめる。だが誕生と死との間には生命が存在するのだ」と書いてある。

釈尊は、『法句經』というお経において、この真理を、われわれにちゃんと警告して下さり、生死を解脱する仏教的信仰の大切さを教えていられるのである。まことに、その句

の如く、およその世で、空へ逃げようが、海へ走ろうが、山の岩窟にかくれようが、どこへ潜もうが、死は必ず追いかけて来て、生物を己れの領域にひきつれて行ってしまうのである。

人はみな、この真理を、生れながらに知っている。誰でもこれだけは覚悟しているはずである。だから「死」という言葉を忌みきらう。

ところが、どっこい、その理窟だけはわかっていても、自分が、いつ、どこで死につかまるかなどとは、ふだん、ほとんど考えもせずに平気で生きている。そんな心配ばかりしていても、日常の仕事も恋愛もする気にはならない。当然のことである。

やがて死ぬけしきは見えず蟬の声

という芭蕉の句のように、平然と鳴きつづけているのが、大抵の人間の哀れな姿なのである。

最近では、交通戦争という言葉もあるように毎日のように、いろいろな事故で、思わぬ人が死んでゆく。新聞の報道や黒棒の死亡広告を読むたびに、私どもの年齢になると、いつ

もわが身にも死の影が忍びよってくる気配を感じ、同じ『法句経』に「われらはここ死の領域に近し」(第六)と説かれてある言葉を、しみじみ実感として受取る日が多い。殊に私

自身、先般は高血圧で最高二一〇などと診断された時は、その後何日かの間、いつ倒れるか、いつ死ぬかと、とそればかりが気になって、夜も眠れなかったものである。幸い、医療のおかげで、最近血圧も下ったのをいいことに、またしてもだんだんと「死」の覚悟から遠ざかりつつある。人間とは現金なものだ、とわれながら情なくなる。だから、若い人たちが、登山で僚友が遭難したり、ベトナム戦争で多くの戦死者が出ることを知っても、俺だけは死んだりなどするものか、と自分勝手にきめこんで、次から次へと性こりもなく山の犠牲者になったり、戦場の危険区域へ出稼ぎに行ったりする気持も、分らないではない。

い。つまり、死の準備を身心ともに十分整えた上で、その日その日の生活を送ってほしい。それが、仏教でいう信仰の重要さである、といったのである。

先日、国立大阪病院耳鼻咽喉科の中村正堯まさたか部長が、自ら胃ガンに罹り、不治の病と知って、その経過や記録を克明に写真に残し、実に鮮やかな安心立命のうちになくなられたことを、週刊誌やTVでご覧になった方も多いと思う。そこには、何の信仰的な修行も出ていなかったが、中村博士の在り方は、正に模範的といっていい死出の旅路であり、宗教者の心に徹した人生の終焉であった。私はこの出世間的な死の態度に感動した。人はすべてこうありたいものであるが、また容易には為しがたい悟りであろう。

しかし、モンテーニュも云っているように「われわれは死の心配によって生を乱し、生の心配によって死を乱している」(随想録)とだけは確かである。「念仏念死」という言葉は、よくこの生死の迷いを脱却する方法を教えている。必ず死なねばならぬものならば何とか安らかに苦しみなく死にたいのが人情

である。いつかは来るであろうその日まで、だから懸命に生きる、いや、超人間的な何か日々生かされてゆく有難さを寸時も惜しむまい。そういう心境に達した時、人は初めて「生きる」から「生かされている」安心感を抱くようになる。何ことも神仏の御はからい、と信じ、念死念仏の生活へ転化する回心の機がそこに訪れるのである。

リュウマチとは「流れる」意味を表わすところで、痛みが身体中の関節を流れて行つて、最後に関節が固まってしまうらしいが、人間も、生れながらに精神のリュウマチに罹っているとえばよからう。健康な生命が流れている間はよいが、一たん死の関節に滞ったが最期、一巻の終りである。その苦悩をいかに安らかに受けとめるかは、ひとえに平生の心の持ち方、つまり「リュウマチに罹りながらも、生かされている」という信仰の力に負うところが多い。

念死念仏の信仰だけは、老若男女をとわず、常に心に置いてほしいと願うのも、そのためである。

久 松 鑽 瑞 僧 正

高 橋 良 和

(中外日報取締役)

久松鑽瑞僧正は威風堂々たるタイプであった。さしあたり今のお角力さんの大鵬、柏戸級の体格であったから装厳衣をつけられたこの僧正は実に立派であった。顔は多少面長で特に頬から顎にかけての線が割合に長いので悪くいえば馬づらというほど長い顔たちであった。

この僧正の在世の頃は浄土宗でも布教界に重鎮が多くって、高山竜善、颯田喜雄などの立派な布教師が揃っていた頃である。この僧正は弁舌爽やかというのではなかったが、重

厚な感じで、特に語尾がややすすっと消えてゆくような口調の話ぶりには特長があった。

知恩院の教務部長として、また或る時は当時の華頂高女の校長にもなった人であったが、平素はよく僧服で皮製のスリッパ風の靴を履いておられたように記憶するのである。

凡そ今から三十五年ほど前である。当時知恩院に宗学者を養成するための専修道場というのがあった、わたしもその道場に入寮を希望したのである。当時のこの道場の上首は林彦明大僧正であったが、わたしはこの大僧正におねがいして入寮を希望したのである。すると大僧正の曰く、

お前のように子供に童話を話すようなものはこの道場に入寮しても無駄である。ここは童話の先生をつくるころでないから本山の久松部長に相談してこい、久松部長がひきうけてやるというのならまた考えるが。

という返事なのである。これには困ったので、実は童話を勉強したいのであるが、それでは今のことばのように一喝を食わされる。そこでまず久松部長にたのんでみることにしようので知恩院にこの部長を訪ねたのである。

久松部長ホウホウとふくろうのような返事をする人であったが、何度もホウホウといいながら、さあ君がやれるかね、むつかしいぞ、となかなかうんとはいってくださらぬのであ

る。

わたしは困ってしまって、「なんとか助けてください」と畳に頭をつけてたのむと、この久松部長は「それならわしがひきうけてやるから林大僧正にそういつてこい」といつてくださったので、上首の林大僧正も「それなら」といつので入寮を許可してもらったのである。それから宗学を勉強したが、せぬかは敢て詮策する必要もなかろうと思うが、かくしてわたしは名誉ある専修道場生になったのである。

ところがそれからしばらくすぎた頃である。

一寸用事があるから知恩院まで来いという電話である。

何事かと思って出かけてゆくと、

実は外でもないが、豊橋に悟真寺という寺があるが、その彼岸会に説教にいけ。

という藪から棒のことばである。あほーな、わたしがと思ったけれど、時の上司である久松教務部長のことばである。勉強のためやと念を押していわれると、はいといわざるを得ないので一応ひきうけることにしたが、童話こそすれ、説教は全くはじめてのことである。第一高座の昇り方から、讃題の読み方さえもわからぬし、また衣もはじめて着るといふのがこのわたしであるのだから、冒険もさることながら自分自身にとって不安でしかたがないのである。

然し人がやるのだから、自分もやってみてはと、多少の安易感も手つだつて、部長の仰せのまま豊橋の悟真寺に出かけてみてこれはまた二度ビックリしたのである。第一この寺の本堂はたしか十一、二間はあったと思うがなんと不堂立惟の余地なしの参詣である。三河の信仰の中心地とあって話は聞きつけているし、念仏の絶え間がないし、その上、説教は午前二席、午後二席の計四席、しかもそれが三日間であるから十二席というのだからこれにはまいってしまったのである。

参考書はなし、種本はなし、京都にいるのなら一寸拝借して間に合わせるのであるが、遠隔の豊橋ではそうもならず、ありったけの材料でありったけの智慧を働かして喋ったのがこの説教である。ほんとに冷や汗をかいしたが、説教をしたのは、あとにも先にもこのときばかり、久松部長を恨らみに思ったのであるが、さて考えてみるとこの三日間の説教がわたしに大きな自信を与えてくれたと思うと、今更ながらこの久松鑽瑞僧正の配慮をうれしく思うのである。

不害庵といって、独特な書風をもっておられたこの僧正の書もなつかしいものの一つ、知恩院執事長に就任したのが昭和二十三年だったと記憶するが、その任命をうけられた日から病気で、一日の上山もなしに逝去された、やっぱりあの大がらな体格が印象である。

浄土のこよみ

七 月

大 橋 俊 雄



(地蔵菩薩の像)

七夕がすぎれば、十日は四万六千日。この日に観音さまにお参りすれば、一回参詣しただけで、四万六千日お参りしたと同等の功德が得られるという。「江戸塩子」に、二月晦日は九十日、正月朔日・三月四日・四月十八

といえ、凡そ百二十六年分にあたる。

観音とならんで、民衆の間に深くなじまれている仏さまは、お地藏さんであり、その地藏をまつる地藏盆は二十四日で、この日地藏堂やとある道かどの石地藏にも、灯明がとも

月は新暦で祝うのに、盆は旧でおるところも多い。子供たちが参加するというならわしは、地藏菩薩が六道に化現して、鬼どもをしかり、賽の河原で楽しくあそぶ子供たちを保護すると信ぜられたところから、特に子供たちが仲間にはいり、親しまれる風俗がうまれてきたらしい。

地藏会や近道を行く祭り客 蕪村

脊の子は夢路をめぐる地藏かな 嘯山

日は何れも百日、五月十八日・六月十八日・十月十九日は何れも四百日、八月二十四日・九月三十日・十二月十九日はいづれも四千日、十一月七日は六千日、七月十日は四万六千日にあたるというているのがそれで、七月十日が最も功德多い日とされている。四万六千日

され、お花や供物がそなえられる風習があちこちでのこされている。地藏盆は多く子供たちが参加して修せられるのが常で、ところによつては八月におこなわれている。旧と新、それは明治になり旧暦から新暦にかわって複雑になってきた。新旧混雑したかたちで、正

京都で葵祭・時代祭とならんで、三大祭りといわれる祇園祭は、十七日から二十四日までおこなわれているが、もとは祇園御霊会と呼ばれていたらしい。祇園八坂神社の祭神はサノオノミコトは牛頭天王ともいい、疫病除けの神と信じられていたから、昔は疫病を京都から退散させようとする人々の願いをこめて祭られたものであろう。牛頭天王が疫病除けの神であるという考えは次第に各地に広まり、八坂神社は日本各地に建てられ、天王さまとして人々に親しまれるようになった。鎌倉時代のころ、八坂をはじめ東山の辺り一帯には聖たちが住んでいた。聖は政権の座

とむすんで、政争のちまたに明けくれする僧団からはなれ、静かに仏道を求めようとする僧衆で、法然上人も叡山黒谷に本坊をもつ聖の一人であつて、聖はたがい横の連絡をもつていた。法然さまが黒谷から西山広谷に居を移したのも、嵯峨や東山に在住したのも、聖の衆団を通じての移住であつた。当初法然上人によつて、同信同行の専修念仏衆団として発生した浄土宗も、次第に中世末から近世にかけての国家的変革期の中で、全国的な規模にと昇華していったが、そのようにして教団の機構の整備がすすめばすすむほど、形式的な興隆はみたまもの、他面僧風は墮落し、専修念仏が喪失するという信仰教団としては致命的な現象があらわれてきた。それは止むを得ないとしても、このさまを見た心ある人たちは、法然上人の精神を体して、念仏のみちみちた世を再現したいものだ、真剣に考えていた。本当の出家とは、俗塵をはなれて、静かな処で一心に念仏することではなからうかと。

この頃、一般には出世とは香衣上人の綸旨をうけることであり、綸旨を頂戴すれば格式

のある、いくつかの末寺を傘下にもつ寺院に住することができ、地方人の上に位することができると考えられていたから、俗塵をさけるということとは、世捨人を意味していた。従つて自分の前途への希望を、出世して大寺院に住するということにかけていた志をふりすてて、すすんで誰に気がねもなしに念仏できることをのぞんだ人は、偉大な僧であつたといわなくてはならない。「出家中の遁世にして、真の出家なるを捨世」と名付けたのは称念上人であり、称念は天文十七年知恩院の法然上人の御廟の近くに一心院を建立した。ここでは関東の檀林に何年学んだとか、座次がどうであつたかということは問題ではなかつた。念仏する人こそ、あがめられる人であり、宗門の浄化に一翼をになうことのできる人であつたのである。称念は天文二十三年七月二十三日になくなり、今に此の日おごそかに開山忌がつとめられている。

称念が一方の雄であるならば、正徳三年七月十五日八十二才をもつて、浄土に旅立たれた祐天上人も、檀林のいしづえをきずいた人として忘れることはできまい。祐天は十二才

のとき、伯父にあたる増上寺山内池徳院の休波に従つて江戸に入り、後ち檀通に師事して剃髪、専ら學業にはげみ、名利を求めず、諸国を経行した末江戸に帰り、孜々として浄業をおさめ、仏号を書写すること、日々数百幅におよんだという。元禄十二年には生実の大蔵寺に住し、翌年飯沼弘経寺に転じ、宝永元年には小石川伝通院、ついで正徳元年増上寺にすすみ大僧正に任ぜられた。翌二年將軍家宣の病いにあたり、特に請ぜられたので、城中に黒本尊を安置して十念をさすけられたという。かくて翌三年寂するまで徳望あつく、上下の尊崇をうけたが、目黒祐天寺は曾つて祐天の念仏道場の遺跡であつたのをおしみ、長くのごそうとする弟子祐海こころざしの志によつて寺としたものであつた。

東京をはじめ大都市では、十三日から十六日まで、祖先の靈を迎えてまつり、その冥福をいのる盂蘭盆会うらなはんえがつとまり、寺々では施餓鬼会が修せられるけれども、地方では八月におこなわれているところが多い。

托鉢

渋谷 賢 応

茅野市仏教会会長

中央線の諏訪市より、一つ東京より茅野と言う駅があるが、ここを中心に町村合併によって、人口三万四千の茅野市が誕生したのが今より十年前である。この人口の大部分が八ヶ岳の裾に散在する農家の小部落で、田園都市と言うより山村都市と言う方が当たっている。ここが私たちの郷土であり、その小部落の中に点在する寺院を集めて茅野市仏教会を結成したのが今より四年前である。宗旨は浄土八、曹洞八、臨済三、真言八、如来一の二十八ヶ寺であるが、正住の寺院は十二ヶ寺となっている。

昨年よりこの仏教会の行事として、お花祭りと歳末助け合いの托鉢をはじめた。名入りの托鉢袋を托鉢に出られないご住職よりご寄進願ひ、各寺の檀徒総代に同道願って心経を読みつつ行うのであるが、何せ部落にちらばる農家の門に立つ

て歩くと言うことは、相当の難行であることは間違いない。

托鉢とは言うまでもなく釈尊在世當時よりの僧伽の経済的基盤であり、六度の第一布施行を勧める化他行であり、忍辱と世音を観ずる道場であることは百も二百も承知のつもりであるが、実際に行って見ると妄想、雑念、いやはやとんでもない醜態をさらけ出し、自分に愛想のつきることしばしばである。

やはり禪宗の諸師はピシャリ堂に入っている。供養米を托鉢袋の蓋に受け、さっと合掌してさっと去る。その態度は実に巍然、毫も渋滞がない。布施する方もさらっとしてすがすがしいし、はた目にも正にお見事とうなづきたくなる。

去年の歳末助け合いの托鉢のときには如来宗、六十二才の老尼と共に歩いたが、それがまったく大音声に心経をあげるので、負けじとがらにもなく頑張ったらとうとう咽をやられて一カ月も快復しなかった。初冬の高原を、八ヶ嶺嵐しに吹かれながら音声一つ変えない老尼には敬敬服服の一語につきる。聞けばこの老尼は十八才の時脊椎カリエスを病み、師のすすめるままに如来宗に入り、この地の庵に住すること三十

六年、毎月、一日、十五日を托鉢日として一日も休むことなく今日に至っていると言うのである。このペテランとカケダシとでは初めから勝負あったと言う外ない。それだけに、特定の人人のこの老尼に対する尊崇は極めて篤いのである。

そこへいくと浄土宗はまったくお粗末である。ある禪宗の同僚から

「浄土宗の托鉢は呉服屋の番頭のようなだ。」などと酷評せられたことがある。ペコペコとやたらに頭を下げると言うのである。「ありがとうございます。」をやたらにくりかえすと云うのである。

成程、思えば財施物は天下の財である。天下の財を私しよと言うのではない。これを釈尊の降誕会に当て、これを歳を越し得ぬ人人に施そうと言うのである。とすれば、さっと頂いてさっと去る。清風の過ぎるが如き底でいいわけである。ところが、哀れなるかな、頂くと言うことに繫縛せられて、さっさつといかないのである。どうしても、これには長い修養の道程が必要であるらしい。

施物は、精粗と多少をえらばないのが行者のならわしであるが、これもすぐ目うつりがする。妄念はどこまでもつきまとう。

或るときおかあさんが貯金箱をとり出してそこから百円玉

を抜き出そうとしたがなかなか出て来ない。こっちは心経を三遍もくりかえしたがまだ駄目だった。するとおかあさん「これご先祖さまがみんな上げるように言っとるんだと思うで、これさらもって行って困る人にやって下さい。いくらあるか楽しみにして開けて見て下さい。」

と言ってさし出された。立ち去りながら涙が頬を伝わった。このようにして本年も五月九日、当寺に於て盛大なお花祭りを厳修した。集る児童七百、一日諸行事を楽しみ、釈尊に感謝の誠を捧げたのである。

「既成仏教は眠っている。このような状態に於ては新興宗教の跳梁は当然である。」

これは現今仏教を批判するものの異口同音の論法であり、またその通りである。何ごとか実際の運動を持つのでなければ、行く先、とんでもない事態が出来するのではないかと我々も常々考えている。しかしながら、論議には金はいらないが運動には資金が必要なのである。地方弱少寺院に、団結と金とを一度に求めることは不可能なのである。

托鉢こそ、我々の唯一のよるべであると思う。これは一般信者も、いかなることか知っていて下さるのである。今更の説明は要しないのである。今後の仏教の復興も、このような事より始められなければならないと思うのである。

門下の頭梁信空

鈴木成元

（大正大学講師）

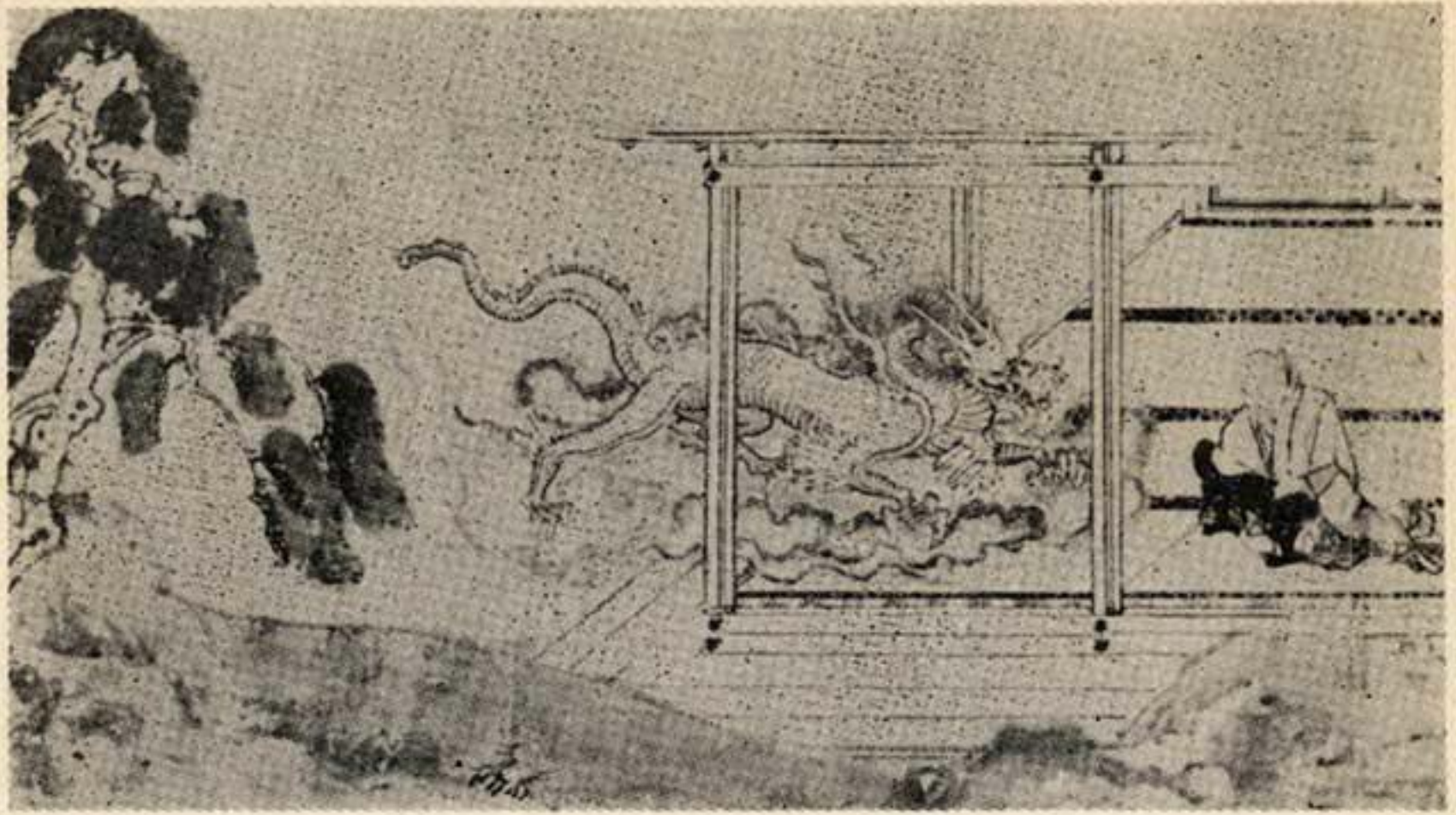
法然の門下には沢山の弟子がいた。それらの弟子の教義は

私は思っている。

専修念仏を主体とすることは事実であつても、個々の教義は実際に異っている。それは個人個人が法然に師事するのであるから、個人個人に師の教義の受けとり方が違うのは当然であり、また法然の方からいえば、弟子その人によって個人個人に教義の説き方が違つていたであらうし、それでなければ説教の価値はないはずである。そしてそれがさらに年代によつても違つていたはずである。それが法然の入寂後、信空・聖光・証空・隆寛・幸西・長西・親鸞など多くの流派に分かれ、たがいに師法然の教義の布教に専心するのであるが、それがだんだんと聖光の鎮西流が浄土宗の正流となつてくる。なるほど現在からみれば二祖の聖光は正しい。けれども当時の状態から考えると、事実上の後継者は信空であつたらうと

信空は法然と関係の深い葉室流藤原行隆の子息、門下の中最初の入室者であり最年長の弟子であつた。そして法然はいうまでもなく、弟子間の信頼も強かつた。建久九年（二六）大病を患つた法然は四月八日付で「没後制誡」を書いた。これは自分の死後どのように葬儀追善を行うか、また房舎資具などの財産処理について遺言状であるが、この中で信空は、念仏聖としての戒行を行う根本道場である黒谷の本房と、繁華街の中心地で庶民説法の重要な場所であつた白川の本房、その他、坂下の藺一所、洛中の地一所、本尊・聖教など大部分を譲り受けることになつてゐる。

師匠から教義の解釈を聞くのは弟子の誰もが受けることであるが、師の財産をもらうのは限られたものであるに相違な



信空夢に竜神を見る（勅伝）

い。肉親であれば別であるが、そこには後継者としての活躍を期待しているものと受とつてよい。

従来『選択集』は秘伝の書といわれ、聖光・証空・隆寛・親鸞・源智の五人にしか授けられなかったといわれている。しかし、私は

そうは思っていない。『選択集』は決して秘伝の書ではなく、弟子なら誰でも知ってなければならぬものである。信空も『選択集』の伝授を受けていたことは、この書を明禪に贈つて、彼を専修念仏者にした事実からみて立証されるし、建暦二年には版行されてさえいるのである。それなのにこの五人が附属を主張するのは、正統性を主張する手段にほかならないと考えられる。

元久元年（一二四）十一月七日、法然は「七ヶ条制誡」を作つて叡山に送った。いうまでもなく専修念仏者に対する圧迫に対し、法然は在京の門弟はもちろん、近国近辺の門弟を集め、自肅自戒を要求する意味で七ヶ条の制誡を掲げ、法然以下、信空・感聖・尊西・証空・源智という順に一八九名の門弟が順次署名して天台座主真性に送った。これは信空の書いたもので嵯峨二尊院に現存している。当時の信空は法然の最も力とする相談相手であり、自分が草案を書き、門下の署名に尽力したことはいうまでもない。

この「七ヶ条制誡」によって叡山の衆徒は一時静かになった。しかし翌年には興福寺の衆徒が奏状を捧げて念仏の禁断を院に訴えた。院も一旦宣旨を下したが、これはかえって専修念仏を擁護する形になり、衆徒としては不満であった。そして何回も摂政良経に催促した。こうしているうち一念義行

空と住蓮・安樂の問題がからみ、良經の急死によって状勢は
変り、承元元年（三三〇）二月十八日、七十五歳の法然はその
責任を負って土佐に配流されることになった。

『四十八巻伝』によれば、この時門下の憂愁悲歎を代表し
て流罪を引きとめるよう法然に忠言したのは信空であった。
また法然の流罪後、京都にとどまって門弟の面倒をみたのも
信空である。同年十一月二十九日、後鳥羽上皇の発願により
最勝四天王院の御堂供養が行われ、その供養の大赦により、
十二月八日、法然は勅免された。けれども入洛を許される建
暦元年八月まで摂津の勝尾寺に住むことになる。このとき勝
尾寺の住僧の法服が破れているので、法然は信空にいつけ
京都の檀越から装束十五具をあつらえてもらい、自分の『一
切経』とともに勝尾寺に寄進したという。この記事は法然の
経済状態を物語るものであり、かなりの疑問もあるが、それ
ほどひどい誤りがあるとは考えられない。鎮西流に重きをお
く『四十八巻伝』の中で、これほど信空に重きをおく記述は
注意しなければならない。経済的に安定していたと想像され
る法然ではあっても、その背景には、法然の手足となって忠
実に命令を守り、苦勞をかけないように活躍をした信空の行
動を忘れることはできない。貴族出身の信空は、このころす
でに法然の身代りになっており、多くの檀越にも信頼されて

いたことが推察されるのである。

建暦元年十一月二十日、法然はやっと入洛を許され大谷に
住むが、疲勞と老衰から翌年正月二十五日入寂した。法然は
社会一般で行なわれていた善福事業の不必要を説き、一週間
だけ一向に念仏して往生を祈ってくれといい、中陰四十九日
の不断念仏をも辞退している。しかし門弟達は師の遺誡を無
視し、図仏写経をはじめ中陰の法要を行った。その提案者は
信空であり、彼自身四七日の法要には導師をつとめ、七七日
には両界曼荼羅阿彌陀如来を本尊とし、『法華経』などを書
写し願文を作って誦したという。ここにはそうせざるをえな
かった信空の人間味がよくでていいると思う。

嘉祿三年（三三二）六月二十二日、比叡山の衆徒は法然を葬
った大谷の墳墓を破却し、遺骸を鴨川に流すため急襲した。
しかし、六波羅探題の北条時氏は内藤盛政に命じて衆徒の乱
行を制止させた。そしてその夜信空や覚阿彌陀仏は遺骸の安
全を計るために嵯峨に改葬することに決め、関東の武士に護
られながら無事嵯峨に着いた。しかしなお衆徒の追求が激し
いので、同月太秦の広隆寺へ移し、翌年西山栗生野に移して
荼毘にし、小倉山に葬ったという。

大谷の御廟が、専修念仏の停止を訴える衆徒の攻撃目標と
なったのは当然であるし、信空が指導的な立場にあって種々

元之元年二月七日

七ヶ条制誠（二尊院所藏）

現在浄土の正流は鎮西流である。さらに嚴密に言えば白旗派が正統となっている。しかし、だからといって、法然門下の状態を考える場合に、信空の位置を忘れたらとんでもない誤りをおかすことになる。

鈴蘭のかおり

— 須藤隆仙著・北海道と宗教人
をよんで —

竹 中 信 常

最近わたしは一冊の好著を得た。それは須藤隆仙氏の「北海道と宗教人」という本である。それでなくとも、夏になるとわたしは北海道を想い出すのが常である。三十年ほど前の学生の頃、数年にわたって毎夏、函館で休暇を楽しんだ経験があり、つい先年は招かれて函館、札幌、旭川とめぐってその美しい自然を心ゆくまで味って来た思い出がよみがえるのである。

それにしても、北海道も変わったものである。日ソ国交関係にからんで、漁業や貿易がさびれ、したがって海辺都市が凋落の途をたどっているのに比して、新しい産業都市、観光都市が内陸にどんどん発展している姿は、新しい北海道の烈しい変貌を物語っている。

こうした北海道の変貌の中にあつて、宗教とくに仏教の占める役割や地位もまた変わりつつある。北海道といえばフロンティア精神にあふれた新鋭の若者を連想さすのである

が、現今ではそうした開拓精神が地について、よりじっくりとしたおちつきに変わって来ている。宗教のばあいも、最初のうち烈しい気魄ですすめられたキリスト教の開拓伝道、そして浄土真宗の意欲的な開教布教なども、今日では着実に他の産業経済の発展の路線を辿れて北へ北へと伸びている。浄土宗のばあいでもつい先頃までは北海道は「開教区」と呼ばれ、アメリカ、ハワイの外地と同じ呼び方、同じ印象にあつた。それが現在では内地の教区と同じ函館教区の名で、同等に扱われているようである。北海道はもはや鈴蘭とアイヌで代表される異国ではなくなった。仏教も、そして浄土宗も内地と少しも異らぬものとなっている。しかし、わたしたちは、このような北海道の変貌、とくに宗教の同質化を当然のこととしてみすごすことはできないのである。その陰に、その裏には、先駆者達の血のにじむ布教精神、伝道精神が脈打っていることを忘れてはならないと思う。

須藤氏の著書は、今日の北海道の宗教のあらために、いかに多くの人々が、いかに労苦に満ちた道を歩いたかを、実に刻明に、そし

て適確に描き出しているのである。しかもその内容は、ひとり仏教にとどまらずキリスト教、神道、そして創価学会初代、二代会長にまで及んでいる。このことは、須藤氏の立場がいかに史実に立脚した公平なものであるかを如実に示している。須藤氏は今更喋々するまでもなく、本誌にも深い因縁を持っておられるが、大正大学仏教学部を卒業してから、爾来北海道一筋に生きて来られ、新しい感覚と思想とをもって念仏信仰を体系づけるため「教学研究会」を主宰し、在来の形骸化された教学に、鈴蘭の香りたかい新風を吹きこむことに努力しているのである。

北海道の開拓は宗教を以って創められ、その発展は宗教とともにおこなわれたという氏の持論は、そのまま、昏迷をつづけているわが宗門の上に置きかえられ、日本の発展は浄土宗のそれとともにあり、念仏信仰によって支えられていることの自覚をうながす好著だと確信する。ひろく読まれることを希望する

発行所 函館市船見町一二三

教育 研究会

頒価 七百円 (振替 函館四二〇九番)

編集後記

○うつとらしい梅雨もすぎ
て太陽がまぶしく輝く真夏
を迎える。若ものの季節で
ある。

野ゆき山ゆき海辺ゆき
真ひるの丘べ花を藉き
つづら瞳の君ゆえに

うれひは青し空よりも

佐藤春夫氏の「少年の日」
の詩の一節である。だれで
も少年時代は純情なうつく
しい生き方をねがうが、そ
れがうらぎられ傷つき人生
の厳しさを味う。しかしそ
の中に人間のたましいは磨
かれてゆく。信仰の大切な
ことはこの傷ついた魂が癒
えてたくましい豊かさを育
ててくれるからである。
○お盆やおせがきの行事は
亡きみたまを偲ぶふかい人
間の情愛をやりおこすたと

もに、生きみたまの在り方
を導いてくれる。

○先日池袋のデパートで佐
藤春夫展が開かれた。文豪
の生活面の記録やら、なま
原稿、老大な作品など興味
ふかいものであった。とく
に展示されている中で、昭
和十一年に出版された掬水
譚（法然上人別伝）は懐し
くその後、「浄土」にも連載
されたので感慨一入のもの
があった。親鸞聖人をつた
える作家は多いが、本当に
法然上人に傾倒し信仰にま
で到った数少ない作家の一
人である。元祖七百五十年
御遠忌に認められた法然上
人讃仰の詩はつよく心をう
った。

○好評の鈴木成元先生執筆
日本浄土教物語、編集の手
違いにより、先月号「隆寛
の活躍と位置」と、今月号
「門下の頭梁信空」を逆に

掲載してしまいました。年
代的に前後しますので御了
承願います。先生及び読者
に迷惑をかけましたことを
お詫び申し上げます。
○連載中の鶴田湛泉氏の
「家康と三河一揆」編集の
都合上次号に掲載させてい
ただきます。

○先月号予告しました「生
い立ちの記」編集部の手違
いにより九月号より掲載し
ますので御了承下さい。

○このところ発送が遅れが
ちで皆様に大変御迷惑をお
かけ致しておりますが、今
般発送カードを整理しまし
たので、序々に早くなると
思います。

○お詫びづくめで恐縮です
が編集部も努力に努力をか
さねております。愛読者皆
様の御意見、御希望等お待
ち致しております。

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

（送料 六円）

会費一力年 金六〇〇円

（送料 不要）

浄土 七月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十年六月二十五日 印刷

昭和四十年七月 一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区根田町一ノ二二

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四番

振替東京八二一八七番

昭和四十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和四十年六月二十五日印刷 昭和四十年七月一日発行

香りたかき浄土トラクト

選択集私解	大正大教授 竹中 信常著	新書判 価 120円 120 P ㇔ 30円
一枚起請文をめぐって	村瀬 秀雄著	新書判 価 120円 102 P ㇔ 30円
真理のはなたば	大正大教授 佐藤 良智著	新書判 価 70円 ㇔ 20円
日常勤行式の解説	村瀬 秀雄著	新書判 価 100円 90 P ㇔ 20円
信仰への導き	文 博 佐藤 賢順著	B 6 判 価 15円 16 P ㇔ 10円
こ法語 の しおり	葵ぐさ 村瀬 秀雄著	B 6 判 価 15円 16 P ㇔ 10円
浄土宗のおしえ	大 正 大 助 教授 宮林 昭彦著	新書判 価 25円 20 P ㇔ 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に (割引いたします)

発行所 法然上人鑽仰会 電話 (262) 5944
振替 東京 82187

—たのしい本でただしいあゆみ—

大道社 こどもの本 シリーズ

新刊 おしゃかさま B 5 判 48ページ
価 130円 ㇔ 40円

指導 高橋 良和 画 野沢ともかつ

..... 既 刊

奈良の大仏さま め ぐ み

B 5 判 48ページ
価 150円 ㇔ 40円

B 5 判 32ページ
価 100円 ㇔ 30円

久遠の仏さま
—法華経七つのたとえ—

B 5 判 64ページ
価 130円 ㇔ 40円

地獄と極楽

B 5 判 64ページ
価 130円 ㇔ 40円

発行所 大道社 東京都千代田区飯田町 1 の 2 1
TEL <262> 5944 振替 東京 8247番